

## 02 患難前携挙説の根拠とその効果

マラナサ・グレース・フェロシッポ 菊地 一徳氏

それでは**第一テサロニケ 4 : 13~18**をお開き下さい。主題説教ということで、タイトルは、『患難前携挙説の根拠と効果』というタイトルでお届けします。『患難前携挙説』又は『患難期前携挙説』”Pre triburation”と英語で言います、の根拠と効果。聖書的な根拠。そして、それを信じる者の影響・効果というものについて検証したいと思います。まずテキストを読みしたいと思います。**第一テサロニケ 4 : 13~18**

『<sup>13</sup> 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。(眠った人々というのは、キリストにあって眠った者たちですから、すでに召されたクリスチャンたちです。)<sup>14</sup> 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで**す**。<sup>15</sup> 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。<sup>16</sup> 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、<sup>17</sup> 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。<sup>18</sup> こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。』

まず注目して頂きたいのは、**13 節**にあるフレーズです。『兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。』クリスチャンたちに対して、このことについては知らないでいて欲しくない。直訳すると、このことについて無知であって欲しくない、というのが原意であります。知らないでいてもらいたくない、無知であってもらいたくない。すなわちこのことについては、あなたがたはよく知っておいて欲しい、十分に理解して欲しい、という内容です。新約聖書の中に、知らないでいてもらいたくない、無知であってもらいたくない、是非ともこれだけはしっかりと押さえてもらって、理解してもらって、信仰生活を歩んでもらいたい、というフレーズが**全部で6つ出てきます**。そのうちの 하나가、今お読みした**第一テサロニケ 4 : 13**の箇所、勿論その内容とは、携挙についてです。実はテサロニケ人への手紙はパウロによって書かれたのですが、そのテサロニケのクリスチャンたちは、まだイエス・キリストを信じてから3週間しか経っていない、いわゆるベイベークリスチャンです。産まれたて、本当に3週間しか信仰歴のないクリスチャンたちです。そんな彼らに「携挙について無知であってもらいたくない、是非このことは知っててもらいたい。」ということですから「携挙」という教理は、神学概念は、これはベイベークリスチャンでも間違いなく押さえておかなければいけない内容であります。ある一定の信仰歴を経た成熟したクリスチャンたちが学ぶところの深遠な高尚な神学というよりも、もう初信者に対して「これはもう真っ先に知ってもらわなければ困る。」といった内容です。ですから、ベーシックです。エレメンタリーです。それを今、皆さんにお伝えしておきます。

次に、**第一コリント 12 : 1** (『さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。』) です。今からいっぱい箇所を言いますから、しっかりメモして下さい。一々開きませんが、そこには御霊の賜物について、聖霊の賜物 (Gift)、それについて、知らないでいてもらいたくない。皆さんは聖霊の賜物とは何か知っているでしょうか。

次に、**第二コリント 2 : 11** (『これは、私たちがサタンに欺かれられないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません』) です。そこでは、サタンの策略について知らないでいてもらいたくない、無知であってもらいたくない。サタンの策略。これは、いわゆる霊的戦いの現実についてしっかりと認識

せよ、ということです。

次に、ローマ 11:25 (『兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、』) です。そこでは、イスラエルの預言的なポジションについて知らないでいてもらいたくない。イスラエルとは、一体神の御計画の中でどのような位置を占めているのか。中には、神様はもうイスラエルに対してすべて約束されたことは、もう教会が取って代わって、すべて教会が霊的イスラエルなんだということで、排除してしまう。「イスラエルは、もうイエスをメシヤとして受け入れなかったので、教会が取って代わったんだ。」という考え方があります。それを「置換神学」といったり、「二契約神学」と呼んだりするのですが。でも、聖書にはハッキリとイスラエルに対するご計画というものが、特に預言の分野において明確にされております。ですから、イスラエルについて知らないでいてもらいたくない。特に預言的なポジションです。

で、もう一つは第一コリント 10:1 (『そこで、兄弟たち。私はあなたがたにぜひ次のことを知ってもらいたいのです。私たちの父祖たちはみな、雲の下におり、みな海を通過して行きました。』) です。そこでは、10章全体と言って良いと思います。旧約聖書に出てくるストーリー。特にそこに取り上げているのは出エジプト記の荒野の民の物語ですが、それはすべてイエス・キリストのことを指し示す予型である。予型論 (Typology) ということです。これについて知らないでいてもらいたくない。紅海を真っ二つに分けてそこを通過したことは、バプテスマの型である、とか。物語は、すべてイエス・キリストを指し示すものだということで、その予型論について、旧約聖書の物語は総じて、すべてイエス・キリストのことを指し示す物語ですから、それを私たちはすべて知らなくてははいけません。ただの物語を字面だけ読んで、適当に自分の生活に役立ててみたり、またただ読み物として楽しむといったものではなくて、すべてはイエス・キリストのことを語っている物語です。これについて知らないでいてもらいたくないと。

そして、もう一つ。これは、パウロによるものとは別に、ペテロによるもので、第二ペテロ 3:8 (『しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてははいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。』) です。そこには主の前では、千年は一日のよう、一日は千年のようであるということ、神様のタイミングというもの。神様のカレンダーと言って良いと思います。これについて知らないでいてもらいたくないと。メモだけして頂いて、後で一つ一つ開いて確認してみてください。神様の時間感覚と私たちの時間感覚は、全く異なります。人間の計画と神の計画は、全く異なっております。そのあたりも知らないでいてもらいたくない、ということで、新約聖書では少なくとも6回、同じフレーズで繰り返されていますから、それは、ここにいる皆さんは間違いなく「私は全部この6項目、しっかり学んでいます、ちゃんと承知しています、理解しています、」と胸を張って言ってもらいたいと思います。

ところが多くの教会では、残念ながらこの6項目が、特に知られていない。おもしろいほどに、この6項目ほど、多くの教会では論争の的になって、むしろ敬遠されているような、現状となっています。携挙について、いろいろな意見があります。携挙なんか信じていない人も大勢おります。また、御霊の賜物 (spiritual gift) について、「今日そのようなものは全部廃れたんだ。」という理解もあります。または、この御霊の賜物をあまりにも強調しすぎて、バランスを欠いた、不健全なコーチの仕方をしている教会も多くあります。そして、サタンの策略について、霊の戦いについて、これも多くの誤解を生んでおります。イスラエルについてもそうです。先ほども少し触れましたけれども、「置換神学」「二契約神学」と言って、「まったくイスラエルは、もう神様に見捨てられたんだ。」ということで、教会が全部取って代わったということで、クリスチャンの間にも、反ユダヤ主義といったものがはびこっております。そして、予型論という問題。旧約聖書の物語は、すべてイエス・キリストを指し示す物語である、ということについ

でも、理解が薄いと思います。で、神様のご計画。神様のカレンダー、時間割、タイムテーブル。今はどういふ時代なのか。今は、世の終わりでありますけれども、まったくそのような神様の時間割を、タイムテーブルを意識していないクリスチャンも大勢おります。とりわけこの 6 つの領域が、多くの教会では、議論的になったり、または無関心とされてしまっている。それこそ無知だというクリスチャンがあまりにも多いと思います。だから、実際のところクリスチャンは、元気がないわけです。この 6 つの項目を知らないで、確信が持てないわけです。神様との関係を正しく持てないわけです。

まあ、そういったことで、今日はその 6 つの中の最初に取り上げた「携挙」ということについて、あなたがたにこのことは知らないでいてもらいたくない、特に MGF は「マラナサ」という名前を冠しておりますので、これは「主よ、来て下さい。」携挙を求める祈り、切望する祈りでもありますので、MGF のメンバーであればもう携挙の専門家であってほしいと思います。誰かから、もし「携挙」について聞かれたならば、ちゃんと聖書から正しく答えて頂きたいと思います。

で、テキストに戻って頂きまして、**第一テサロニケ 4 : 17** のところを今見てみて下さい。そこにそれぞれ携挙の具体的なイベントがどのようなものであるのか、ということが書き記されています。『次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに（“彼ら” というのは、既にキリストにあって眠った、天に召された人たちといっしょに）雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。』

「携挙」なんて言葉は、聖書に使われていないじゃないですか、というかもしれません。でも、それは「三位一体」といった言葉が、聖書に使われていないのと、全く同じであります。「携挙」、英語では『ラプチャー』”raputure”と言います。「一挙に引き上げられ」というところに、実はその英語の“ラプチャー”という言葉、または日本語の「携挙」という言葉がそこに使われています。厳密にはギリシャ語では『ハッパーゾー』”harpazo”と言います。で、ラテン語の聖書では『ラプテュス』”raputus”という言葉が使われていて、英語の『ラプチャー』”raputure”の語源です。それを日本語では「携挙」と訳すわけですが、新改訳聖書では「一挙に引き上げられ」と訳されています。新約聖書の中では全部で 13 回も使われている重要な言葉です。いくつか用例を言うならば、**ユダ 1 : 23**（『火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によって汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。』）。「ハッパーゾー」という言葉が使われていて、そこでは『つかみ出す』と新改訳聖書は訳しております。

次に**使徒 8 : 39**（『水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。』）では、『連れ去る』というところに“ハッパーゾー”が使われています。もう拉致するという感じです。

次に**マタイ 11 : 12**（『バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。』）では、『奪い取る』というところに“ハッパーゾー”が使われています。

全部で 13 あるので、全てを取り上げることはしませんが、そのように新訳の中ではいくつか訳出されております。さらに厳密に“ハッパーゾー”という言葉突き詰めてご紹介すると、それは『力づくで掴み取る。盗み取る。強奪する。』というふうにも訳されます。『自分のものだど熱心に主張する』というふうにも訳されます。イエス・キリストにとって私たちは花嫁ですから、まさに花嫁泥棒のようにして「あなたはわたしのものだ。」そして、地上から私たちは掴み上げられるわけです。それが『携挙』ということなんです。聖書の中でそのようにイエス・キリストが戻って来られる、再来されるということは、2 回のイベントとして、2 段階に分けられるものとして描かれております。それを『再臨』とも言うんですけども、ですから言い直すと聖書の中にはイエス・キリストの再臨は 2 段階であると。一つは、聖徒のために来られる、クリスチャンのために来られるというもの、これが『携挙』のことです。もう一つは、聖徒

と共に来られる、クリスチャンと共に再び来られる、それを『地上再臨』とも言います。二種類言いました。最初の方は、聖徒のために、クリスチャンのためにイエスが来られる。これを『携挙』または『空中再臨』とも言います。で、二番目は、二段階目は、聖徒と共に来られる、クリスチャンと共にということ、もう一度クリスチャンは天に引き上げられてますから、イエスと一緒に地上に降りて来られる。これを『地上再臨』とも言います。まあ、この『地上再臨』について今詳しく見ることは致しませんが、黙示録 19 : 14 (『天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。』) を参照箇所としてメモしておいて下さい。イエス・キリストが白い馬に乗って、白馬に乗って、私たちクリスチャンたちを、花嫁と一緒に連れて天から地上に下って来ます。その時、地上では人類最終戦争と呼ばれる『ハルマゲドンの戦い』が展開されてます。私たちも白い馬に乗って下って来るんです。ですから、少なくとも聖書には、キリストの再臨は 2 段階に分けられていて、聖徒のために来られる『携挙・空中再臨』と、聖徒と共に来られる『地上再臨』と。その時には、キリストを拒絶した罪の世界を裁きに来られます。ですから二回目の『地上再臨』これは世の終わりのイベントですが、裁き主として、王の王、主の主として来られます。でもその前に、要するに地上が神の怒りを注がれて患難時代に突入する前に、キリストの花嫁と呼ばれるクリスチャンたちは、地上から引き上げられます。これが『携挙』というイベントです。ですから、聖徒のために、花嫁のために、迎えに来られる。今は、そのことを集中的に皆さんにお分かちしていきたいと思えます。

で、但しその携挙ということについては、実は大きく分けて 4 つの説があります。4 つの携挙説というものがあります。で、私はこのメッセージのタイトルを『患難前携挙説の根拠と効果』というふうに名づけました。それが最初に取り上げたい第 1 番目の携挙説であります。pre triburation というものです。『患難前、または患難期前携挙説』。それが最初のもので、2 番目は、『患難中携挙説』。英語では、mid triburation。「患難期とは一体何ですか。」と言う人もおられるかと思いますが、世の終わりになると 7 年間の患難時代というのがやってきます。で、その 7 年間の患難時代というのは、まずヨーロッパのリーダーとして、欧州連合のリーダーとして、反キリストと呼ばれる者が彗星の如く現れます。そしてその男が混沌とした中東に平和をもたらします。中東和平条約なるものを 7 年間結ぶわけです。その 7 年間の間が患難時代とも呼ばれます。但し、その時代は神の怒りが注がれる、キリストを拒絶した罪の世界に対して神の怒りが注がれるという意味で、患難時代と呼ばれます。まあ、後でもこのことについては触れますけども、その患難時代の来る前に携挙があるんだというのが『患難期前携挙説』であります。

で、2 番目に紹介した『患難中携挙説』というのは、患難時代のちょうど中間期、7 年間の中間期は 3 年半ということです。その時にあるイベントが起こるんですが、反キリストが今は無いイスラエルにエルサレム神殿を再建するんですが、その最も聖なる所、至聖所と呼ばれるところにこの反キリストという人物が立って、本来はそれは許されていないことですが、そこで「我こそは、神だ。」という宣言をいたします。その時に、その中間期にクリスチャンたちが地上から携挙されます、というのが『患難中携挙説』mid triburation というものです。

で、3 番目として『患難後携挙説』post triburation、これは 7 年間の患難時代がちょうど終わる時、先にも触れたようにその時には、天からイエス・キリストが地上に降り立つ『地上再臨』が起こるちょうど時期なんですけれども、その時に実は携挙があるんだと。要するにこの『患難後携挙説』というのは、イエス・キリストの『地上再臨』と『携挙』を同一視するわけです。その時まで実はクリスチャンたちは患難時代を通過していくんだと。で、もちろん携挙もあるんですが、携挙されて空中に引き上げられます。でもイエスが地上に降り立つので、雲に上げられたと思った瞬間にすぐに地上に降りるといって、アップダウンの激しいそういうものなんですけども。

で、4 番目はこれはそんなに多くの支持者がいらないんですけども、最近注目されております。『神の怒

『**前携挙説**』初めて聞く人もいるかもしれません。英語では **pre-wrathrapture** と言います。これは神の怒りというのが、いわゆる患難時代のことなのですが、ただ患難時代と言っても 7 年間あって、前半の 3 年半の時代は比較的平和な時代だとみなされます。本格的に神の怒りが注がれるのはもう少し後だということで、一応クリスチャンたちはその患難時代の一部を通りますが、神の怒りが注がれる前にクリスチャンは携挙されるという考え方です。神の怒りが本格化する前にクリスチャンたちが地上から引き上げられる。ちょうど前半の 3 年半のどこかの段階でということです。少なくとも患難中携挙説よりも少し前にクリスチャンたちが引き上げられるという考え方があります。

で、今 4 つ挙げました。『**患難前携挙説**』、『**患難中携挙説**』、『**患難後携挙説**』、そして『**神の怒り前携挙説**』というのですが、私は最初に取り上げた第 1 番目の『**患難前携挙説**』が正しいと確信しております。まあ、これを言うと大変な議論になると思うんですけども、なぜ私の説が正しいのか。それを今から皆さんに聖書の中から皆さんにも吟味して頂いて、根拠をたくさん挙げたいと思います。これでもかと言うくらい、時間の許す限りになると思うんですが。中には「この患難前携挙説というのは、最近の教えじゃないか。」と、「いわゆるキリスト教原理主義者たちが聖書を文字通り捉えて、そして自分たちに都合の良いように、自分たちの世界観に合わせて編み出したセオリーじゃないか。」という意見もあります。確かに患難前携挙説を支持する者たちは、聖書を文字通り理解しようとする人たちの信仰がベースになっております。それをキリスト教原理主義者だとか、ファンダメンタリストとか、根本主義者なんていうふうにも呼ばれて、揶揄されることが多いんですけども、その揶揄される中で『**患難前携挙説**』はつい最近持ち上がって最近の流行であるというふうな見方で、昔はこんな説は取り上げられなかったと。これはあくまで新説である、または珍説であるというふうな言われ方がされます。でもそれは神学の歴史を全く知らない人たちの意見でありますけれども、まあ、そのことについて今詳しく話すことは致しません。私が皆さんにお伝えしたいのは、聖書からこの患難前携挙説が妥当かどうか、正当かどうかをお伝えしたいのであって、まあいろんな神学の歴史を今話すとそれこそ時間がなくなってしまうので、敢えてそれは割愛致します。ただ一言だけ言わせて頂くならば、この説を揶揄する人たちで「最近 1,800 年代になってこの**患難前携挙説**は、初めて取り上げられるようになった。」と言う意見に対しては、それは一言反論しておきます。既に初代教会では、イエス・キリストがいつ戻って来られても良いように準備しておりました。これは聖書を読めば一目瞭然です。パウロもそうでしたし、そしてパウロに続く初代教会の使徒たち、そしてその使徒たちの弟子と呼ばれる教父、**church father** と呼ばれる人たちも、この**患難前携挙説**を確信しておりました。ただイスラエルがローマ帝国によって迫害されるようになりますと、教会からもユダヤ人クリスチャンたちが段々世界中に離散されていって、そして教会からユダヤ性というものが失われていきます。イスラエルという国も最終的には消滅してしまいます。そうすると、神様がイスラエルに対して約束されている聖書預言というのが、文字通り理解出来なくなってくるわけです。もうイスラエルという国がないのに、どうやって神様がこのイスラエルに対する預言を成就するのか。世界中から再び離散したイスラエルの民を神様が集めてくる、そしてこの国を再建する、という約束があるんですが、「ローマ帝国の前にとてもそんなことは実現しそうもない。これはやっぱり象徴的に理解すべきだ。文字通り理解すべきではなくて、霊的に理解すべきで、むしろイスラエルなんていうものは、これはイエスをメシアとして拒否したんだから、教会が霊的イスラエルとしてこの約束を象徴的に理解すべきだ」と言う考えが段々教会の中に支配的になっていきましたので、その結果聖書を文字通り理解するその聖書の捉え方が、教会の中から失われていったわけです。ところが 1,800 年代になると再び世界中からイスラエルの民が祖国に帰還するようになります。1,900 年間もほとんどイスラエルという国はもう無い状態だったわけです。で、そこでやっぱり聖書の預言通りイスラエルは世界中から集められて、そしてこの国は再建されるのではないか、という希望が、きざしが、クリスチャンたちの間にも見えてきて、もう一度聖書を文字通り理解すべきではない

かという考えが再興されたわけです。ですから新しい説でも何でもありません。ちょうど 1,800 年代から世界中のイスラエルの人たちが、ユダヤ人たちが祖国に帰還し始めたので、もう一度立ち返ろうということで、1,900 年間も失われていたその時代に教会はいつしか聖書を文字通り理解するということをやめてしまったんです。あまりにも非現実的過ぎたので、これは文字通りではとても理解に苦しむということだったんですが、まあそういった背景がありますので、もし「**患難前携挙説**なんていうのは 1,800 年代に生まれた新説珍説だ。」というふうな言われ方をしたならば、皆さんはそのように踏まえて頂いて、そしてお答え頂きたいと思います。

で、今からこの**患難前携挙説**が、確かに正しい説であるということ、聖書から皆さんにお分かちしていきたく思いますので、聖書をベースとすればこれはクリスチャンであれば誰でも公平にさばくことが出来ると思います。人の意見ではありません。それぞれの神学的な見解で判断するんじゃなくて、聖書で判断してもらいたいということで、今ちょうどテキストでお読みした**第一テサロニケ 4 : 18**をもう一度開いて見て下さい。第 1 番目の根拠です。なぜ**患難前携挙説**が正しいのか、妥当なのか。その根拠の第 1 番目として、**第一テサロニケ 4 : 18**。携挙の教えのこれが目的です。『**こういうわけですから、このことばをもって（携挙の教えをもって）互いに慰め合いなさい。**』“**慰め合いなさい。**”と言えるのは、**患難前携挙説**を信じている者たちだけです。患難時代の前にクリスチャンたちが地上から一挙に引き上げられます。で、患難時代が始まったと同時に世界に天変地異が起きます。戦争も起きます。飢饉も起きます。疫病も起こります。大変な時代です。いまだかつて人類が経験したこともないような恐ろしい災害が、戦争が、一挙に訪れます。悪霊の力が顕著に現れます。その時代に、もしクリスチャンがいたならば、とてもお互いに慰め合うなんていうことは出来ません。もうクリスチャンであれば誰でも迫害されます。慰め合うなんていうことはとてもその時代には出来ません。でも、もしあなたが**患難前携挙説**を信じるならば、間違いなく慰め合うことは出来ます。「その時代は通らなくても良いんだと。」他の残りの 3 つの携挙説、**患難中携挙説**をとっても慰め合うことは出来ません。**患難後携挙説**は、もつての外です。7 年間クリスチャンたちは、ほとんど殺されると思います。慰め合うことは出来ません。そんな苦しい思いを、あなたはまだしも、あなたの家族も強いられるわけです。そして 4 番目にあげた**神の怒り前携挙説**、これも後で詳しく説明しますが、実際ところは 7 年間の患難時代がスタートした時点から、神の怒りが注がれ始めますので、これも無理があります。いずれにしても**患難前携挙説**だけがクリスチャン同士の間で慰め合うことが唯一できる説であります。これが 1 番目です。

で、2 番目は、そういう話をすると、反対者たちは反論します。「結局、患難前携挙説の連中は弱虫なだけだ。彼らは現実逃避をしたいだけだ。この世から急に地上から引き上げられて、現実のこの苦しみから、苦難から、患難から、ただ逃げようとしている、現実逃避をしたいだけの者たちなんだ。」と言う非難がありますけれども、**ルカの福音書 21 : 36**をお読みしたいと思います。メモもして頂きたいと思います。『**しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。**』これは有名なイエス・キリストのオリーブ山の説教の一部です。このオリーブ山の説教とは、世の終わりにどんなことが起こるのか、世の終わりの前兆についてイエス・キリストが教えられている箇所です。その中でイエスは『**これらすべてのことから（患難時代に起こるありとあらゆる災難、災害から）逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。**』イエスが「**逃げるように祈りなさい。**」と言っているんです。ですから、反対者が患難前携挙説の人たちに対して「あなたたちは逃げる事しか考えていない。逃れる事しか考えていない。現実逃避をするだけなんだ。」と言ってるかもしれませんが、でもイエス・キリストの言葉を注目

して欲しいと思います。イエスがまさに「逃れるように祈りなさい。」と、イエスがそう命じているのであれば、私たちも逃れるように祈らなければいけません。で、『人の子の前に立つことができるように』。これはどういう意味でしょうか。イエス・キリストの前に立つことができるように。これはすなわちその時までには、間違いなくあなたはイエスを主と心で信じて、口で告白して、イエスとの関係を持っておくように。キリストのものとなっているように。クリスチャンとなりなさい、ということです。もし、あなたがクリスチャンでなければ、人の子の前に立つことはこの時出来ません。そのために祈りなさいと。まずあなたは大前提として、しっかりと信仰告白をして、イエスとの生きた関係を持たなくてはなりません。もしそこに確信がないならば、あなたは携挙されないかもしれません。

で、次に3番目です。それは**黙示録 2 : 21~22**をもってお伝えしたいと思います。これは、イエスキリストが小アジア、今日のトルコの7つの教会に宛てた手紙の1つで、テラテラという教会に宛てたものがあります。『<sup>21</sup>わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとしない。<sup>22</sup>見よ。わたしは、この女を病の床に投げ込もう。また、この女と姦淫を行なう者たちも、この女の行ないを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もう。』まあ、この女というのは、『イゼベルという女』と**20節**にあります。これはイゼベルという女の偽りの教えを取り込んでいる教会に対して、テラテラという教会に対して、イエス・キリストが非難している言葉です。特に注目して頂きたいのは、まあ、ここで言う“姦淫”というのは、文字通りの性的姦淫というよりも霊的姦淫、霊的不品行です。神以外のものを愛するというものです。それは霊的姦淫ということですが、そのような教えがこのテラテラの教会の中にはびこっていたわけです。で、もしその教えを信奉し続けるならば、悔い改めることをしないならば、間違いなく**大きな患難**の中に投げ込まれると、**22節**の終わりにあります。この『**大きな患難**』というのが、患難時代のことであります。つまり教会の中には、患難時代に投げ込まれる者たちも一部あると言っているわけです。ただ、誤解しないで下さい。教会の中で患難時代に投げ込まれる者というのは、イエス・キリストを知らない者たちです。要するに霊的姦淫を犯し続けて、その罪を悔い改めない者たちですから、名ばかりのクリスチャンです。「信仰告白はしました。バプテスマ受けました。教会員です。」でも、名ばかりのクリスチャンはいます。でも、もう1つ覚えて欲しいことは、悔い改めるならば**免れ**ます。悔い改めないままで、イエスとの関係を持たないままでいるならば、いくらクリスチャンぽく生活していても、必ず患難の中に投げ込まれるということでもあります。で、同じく今**黙示録**を開いているようであるなら、**3章 10節**を見て下さい。これは、その7つの教会の内のもう一つの教会、フィラデルフィアの教会にイエスが語った言葉です。このフィラデルフィアの教会というのは、世の終わりの終末時代の教会を象徴しております。『あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に來ようとしている**試練の時**には、あなたを守ろう。』“全世界に來ようとしている**試練の時**”のこの“**試練**”というのが、“**患難**”と同じ言葉です。患難時代のことを指しています。ただ、ここには『**試練の時**には』、若しくは『**患難の時**には』とありますけれども、この“**時には**”というところの原語は、ギリシャ語で“エク” ek と言います。これは「〇〇の中から外へ出す」という意味であります。英語で言えば out of です。ですから、“患難時代の中から”、ではなくて、“患難時代の前に”必ずイエス・キリストが教会をそこから外へ出して下さるというふうに理解するわけですが、その辺をいろいろな説があって、“患難時代の中から”出すのか、“患難時代が来た時から”出すのか、“患難時代の前”に既に守って頂けるのか。まあ色々あると思うんですけども、その辺も議論の的になっているわけですが、ここで教会の中に患難時代を通る教会もあれば、通らない教会もあるというところをポイントとして押さえて頂きたいと思います。

で、もう1つ、同じく**黙示録**の中で、これは4番目の根拠になりますけれども**黙示録 1:19**。これはヨハネの黙示録を紐解く上での鍵となる聖句です。『そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。』黙示録の学びを終えた方は、もうすっかり記憶に焼きついていると思います。これは黙示録のアウトラインです。神様が与えて下さっている神のアウトラインですから、これは黙示録は誰にでも分かるように敢えて用意されているもので、決して黙示録は難解な書ではないということです。で、“**見た事**”というのは過去のことで、これは、ヨハネが天の栄光のキリストを見たという場面、1章の内容です。ヨハネが見た事は過去の面です。栄光のキリストの姿を見たということ。で、“**今ある事**”というのは**黙示録**の中では**2章3章**の内容です。7つの教会の内容で、これは教会の歴史を指す箇所です。教会史全体をパノラマのように見ることが出来ます。初代教会から、世の終わりの、今の、現代の、終末時代の教会に至るまで、それぞれの時代を表す教会が7つ、要するに教会史というのは7区分に分けられるということが、分かります。先ほど触れたフィラデルフィアの教会というのは、その世の終わりの教会であります。世の終わりの教会は携挙されるということなのですが、で、もう一つ“**この後**”という言葉があります。“**この後**”というのはギリシャ語では“**メタタウター**”という言葉で、同じ言葉が**4章**に使われています。『そののち』“**メタタウター**”であります。ですから、『**この後に起こる事**』というのは、**4章**以降の内容だということは、これは一目瞭然です。で、特に**4章5章**のところには、教会が天に引き上げられるという場面です。ヨハネが幻の中で引き上げられているんですが、教会が天に引き上げられている内容です。ちなみに“**教会**”という言葉は**2章3章**には何回も出てきます。実に19回も出てきます。でも**4章**以降には、“**教会**”という単語は1回も出てきません。すなわち、もう**4章**の段階で教会は、天に引き上げられているからです。**4章5章**は、教会が天に引き上げられたその情景を描いております。で、もちろん**4章5章**の後に**6章**が続くんですが、**6章**から**19章**までが地上に、すなわちキリストを拒絶した罪の世界に神の怒りが注がれる患難時代が描写されています。**6章**から**19章**が患難時代の描写、7年間の患難時代です。で、**19章**の後半の部分にその最終戦争、ハルマゲドンがある時に、地上にイエス・キリストが聖徒を引き連れて、私たちクリスチャンを、もう引き上げられた花嫁たちを、一緒に連れて降りてくる。文字どおりはオリーブ山の上に降りると**ゼカリヤの預言**は言っていますが、それが**19章**の後半にあります。地上再臨。携挙ではありません。教会を伴ってきます。教会を伴ってくるという事は、単純な理解が出来ます。既にその前に教会は引き上げられているということです。引き上げられていなければ、イエスは天から教会を連れてくる事は出来ません。で、続く**20章**はその再臨の後に反キリストも、偽預言者も、そしてキリストに反抗する全勢力は、一瞬にしてキリストの御口の息をもって滅ぼされて、そして退廃的な世界、荒廃した世界は、すべて罪が入る前の天地創造時の美しい地球に刷新されます。そこからイエス・キリストはメシヤ王国、千年王国という統治を始められます。千年間地上は、サタンもいない、罪もない、完全な世界としてイエスが文字通りエルサレムで支配される。そういう時代が千年間やってきます。平和と繁栄の時代であります。で、その後もう一度イエス・キリストが、千年間底知れぬところに縛っていたサタンを解き放って、そして千年王国時代に生きている人間に対して、「あなたたちは私に従うのか、それともこのサタン、古い蛇、竜に従うのか。」というところで選択権を与えます。これがエデンの園にあったいのちの木と、善悪の知識の木の本体であります。いのちの木とは、イエス・キリスト。善悪の知識の木とは、サタンの象徴でもあります。で、残念ながら多くの人たちはイエスではなくて、サタンを選びます。で、ここでもう一度さばきが起こります。それまでは、サタンも罪もなかったので地上の千年王国の時代の人たちは確かに平和で繁栄していましたが、選択の余地がなかったわけです。イエスに従うほかなかったわけです。自由意志が、そこではある意味行使出来なかったわけです。でも最終的には自由意志を持ってイエスを選ぶ者たちもあれば、サタンを選ぶ者たちもある。それがゴグとマゴグの反乱というふうにも**黙示録**の**20章**には記されています。で、結果的にはイエスが裁き主としてご自分を拒否した者たちを裁かれます。



それが大きな白い御座の裁きというもので、**黙示録の 20 章**に書いてあります。で、その後にいわれる本物の天国が訪れます。新しい天、新しい地、新しいエルサレム。これが、私たちが永遠に暮らす本物のマイホームです。千年王国は、天国ではありません。戦争もなく、また動物界においても弱肉強食もない世界です。死がない世界、病気もない世界、一切障害もない世界が、確かに千年王国に訪れますけれども、それは永遠に続く世界ではありませんでした。本物の世界は新しい天、新しい地、全く次元の違う世界であります。そこは神の都とも呼ばれます。新しいエルサレムとも呼ばれます。そこに私たちは未来永劫キリストの花嫁として、また神の子どもとして幸せに暮らせる世界が**黙示録の 21 章**であります。まあ、それが最終段階なんですけれども、そのようにして**黙示録**はアウトラインがこの**1 章 19 節**で「見た事、そして今ある事、で、この後に起こる事」と分かり易く解説していますので、これは間違いようがありません。

で、5 番目の根拠です。**黙示録**の方で注目して頂きたいのは、その**2 章 3 章**の中に 7 つの教会が登場しているというお話をしましたが、その 7 つの教会にそれぞれイエス・キリストが手紙を書いているんですが、その手紙の結びの言葉は全部共通しています。手紙の締めくくりの言葉です。7 つ教会がありますから、皆さん後で**2 章 3 章**から確認してみてください。必ず最後にイエスはこういう言葉で締めくくっています。『**耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。**』というのが**2 章 3 章**は、必ず 7 つの教会すべてに宛てられている手紙の末尾の締めくくりの言葉であります。で、今の言葉と**黙示録 13 章 9 節**の言葉を比較して見て下さい。似た言葉ですが、微妙に違います。または明確に違うといった方が良いかと思えます。そちらには『**耳のある者は聞きなさい。**』となっています。で、**13 章**というのは先ほどのアウトラインで思い出して下さい。もうこれは患難時代の話です。患難時代は**黙示録**では**6 章**から**19 章**ですから、ちょうど患難時代の真ん中・中期の話です。ここには反キリスト、偽預言者がでてきて、そして反キリストは全人類に対して獣の刻印を押すように言います。額か右手の甲に。この額か右手の甲に獣の刻印、これは数字では**666**というものも暗示されていますけれども、これは反キリストの名前を意味するものです。その反キリストのマークを受けていないものは、経済生活が送れません。買い物も出来ません。給料も貰えません。社会保障も受けられません。でもこの獣の印を受けてしまったら、もう最後です。二度と悔い改める事は出来ません。この獣の印を受けるということは、あなたの脳が支配されることとなります。もうあなたはイエス・キリストを信じることが出来ないロボットのような人間になってしまうので、これだけは受けてはならないとここにちゃんと強く強調されており、警告されています。反キリストを礼拝する者になってしまいます。ですから、そこで『**耳のある者は聞きなさい。**』とされています。ただ『**耳のある者は聞きなさい。**』ということで、そこには『**御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。**』とは書いてありません。すなわち、もうこの時代には、教会は地上には存在していないということです。教会以外の人たちに対して『**耳のある者は聞きなさい。**』と。絶対に反キリストの印、mark of beast、獣の刻印は受けてはいけない。一度受けたら、もうあなたは絶対に救われないから、と言っているわけです。これは教会がもう既に天に上げられていることを示唆しています。患難時代の中期の話ですから、携挙説の中に『**患難中携挙説**』というのがあると云いましたが、これはもう成り立ちません。もしあなたが『**患難中携挙説**』を支持するならば、もうこの時代、**13 章**の段階で、教会は地上には存在しないということです。

で、6 番目の根拠として、患難時代というのは、神の怒りが注がれる時代だということで、**黙示録 6 : 16 ~17**を開いて見て下さい。もちろん、先ほどのアウトラインでご紹介したように、患難時代は**6 章**からスタートしています。**6 章**から**19 章**の前半までということで、その**黙示録 6 : 16 ~17**『<sup>16</sup>山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と（これは父なる神です。）小羊の怒りとから（これはイエス・キリストの怒りです。）、私たちをかくまってくれ。<sup>17</sup>御怒りの大いなる日が

来たのだ。だれがそれに耐えられよう。』患難時代がもうスタートしたその時点から、これは父なる神と子なる神・小羊と呼ばれるイエス・キリストの怒りが注がれる時代なんだということでもあります。もう患難時代がスタートしてすぐです。ですから、『**神の怒り前携拳説**』というのは、ちょっと怪しいわけです。もう既に患難時代がスタートしたこの段階から、神の怒りは注がれているんです。クリスチャンは神の子どもです。そしてキリストの花嫁です。ですから、私たちが神の怒りの対象になることは、まず考えられないことです。ましてはキリストの花嫁が、花婿イエスの怒りの対象になるということは、まず考えられないことです。ありえないと言って良いと思います。というのは、すべての神の怒りは、既に二千年前イエス・キリストが私たちの代わりに十字架の上で負って下さったので、もう私たちは神の怒りを受けない。神の怒りの対象からは外れて、神の敵ではなくなったんです。イエスを信じる者はこの神の怒りの対象とはならない、神の子どもとされているわけですから、患難時代にクリスチャンたちが神の怒りを受ける、花婿キリストの怒りを受けるなんていうことは、まずありえないことですし、あつてはならないことです。これは救いの教理にも相反することです、矛盾することです。で、**第一テサロニケ 5：9～11**も開いて頂きたいと思います。テキストは**第一テサロニケの 4 章**でありました。ですから、文脈も意識してください。**第一テサロニケの 4 章**では、携拳の話がありました。その次の章、**5 章**です。『**9 神は、私たちが御怒りに**会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあつて救いを得るようにお定めになったからです。**10 主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。11 ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。**』文脈はもちろん、携拳の文脈ですので、携拳の教えが**4 章**にあつて、その続きです。**5 章 1 節**を見て頂いても分かります。『**兄弟たち。それらがいつなのか、またどういつかについては**（携拳の話です。）、**あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。**』その続きも時間のある時に読んでみて下さい。ですから、患難時代のことが“御怒り”と呼ばれています。私たちはその“御怒り”、患難時代に遭うようには定められていないんだ、と言われていました。もう神の怒りは、イエス・キリストがもう私たちの代わりに二千年前に十字架の上で負って下さいました。この神の怒りのなだめの備え物となられたのが、私たちの花婿です。その花婿がまた再び花嫁を怒るでしょうか。ひとり子をお与えになるほどに愛しておられる父なる神が、その子供たちを再び怒るでしょうか。ありえないことです。

で、次に 7 番目の根拠として、「どうも患難前携拳説を支持する人たちは、<sup>ただだ</sup>只々患難が嫌で、怖くて、逃げて回っているだけだと。でも実際に聖書ではクリスチャンたちは皆患難に遭うように定められているのではないか。」と言う主張もあります。患難という言葉を使っても、意味合いが異なりますので、その使い分けもちゃんと線引きをして、区分けして頂きたいと思います。たとえば、よく持ち出されるのが**ヨハネの福音書 16：33**。『**わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあつて平安を持つためです。あなたがたは、世にあつては患難があります。**（「ここに書いてあるじゃないですか。クリスチャンは世にあつては、患難があると。だから患難時代を通らないというのはおかしい。」と言われるわけです。）**しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。**』と。ただ、覚えて欲しい事は、これはもちろんイエス・キリストの言葉です。『**あなたがたは、世にあつては患難があります。**』この“患難”というのは、これはイエス・キリストの敵であるサタンから来る患難です。イエスを憎む者は、イエスを信じる者たちを憎むものであります。この患難は、ですからこの世にあつてサタンから来る患難です。迫害であつたり、例えば皆さんは、クリスチャンになった途端に、突然ブルーになってしまつたり、朝起きたらなんか鬱っぽい、どうしてなのかな、理由は分からないけれども何かプレッシャーを感じるとか、何かつまはじきにされているようで、何か理解されないようで、何か馬鹿にされているようで、何かいじめられているようで。根拠がないけれども、理由が分からないけれども、何かそういうネガティブな経験

をなさることはないでしょうか。これはクリスチャンになったら必ずあることです。理由がなくてもです。でも実際に聖書では、その理由は、あなたには患難があります。それはサタンがあなたのことを憎んでいるから。もちろん直接的にサタンは私たちに触れることは出来ませんが、迫害を加えます。あなたをブルーにすること、鬱にさせることは、サタンには出来ます。敵の働きを私たちは意識しなくてははいけません。霊の戦いは現実です。目に見えませんが、常にクリスチャンは戦いにさらされています。戦場であって、のほほんと生きていることは出来ないはず。熾烈しれつな戦いがありますから、常にそういう意味では、何か敵意を感じる、何かプレッシャーを感じる、何か鬱になるような、気が滅入ってしまうような、そんな時々根拠も分からないような思いが襲ってくる場合があります。まあ、それはイエスが言われている通りに、世にあっては、患難があります。これは避けられないことです。使徒の働きを見て頂いてもお分かりのように、教会は常に患難に直面しています。ですから、これが、イエスが言われていることで、地上にいる限りは常にクリスチャンは患難があります。パウロも言いました。『**キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。**』（第二テモテ 3:12）全員もれなくです。イエス・キリストに従おうとすればするほどです。イエスを愛すれば愛するほどに必ず迫害を受けます。その一方で、世の終わりにある患難時代、7年間の患難時代は、これは明確に違います。神の怒りと子羊の怒りでありますから、これとサタンから来る迫害・反対と同一視してはなりません。同じ言葉が使われているから、つついと同じように混同しがちでありますけれども、クリスチャンはサタンからの患難を受けます。もちろん神が許された範囲でありますけれども。でも、いわゆる神の怒り、子羊の怒りと呼ばれるような7年間の世の終わりの患難時代には、遭わないように定められております。そこを混同してはいけません。

で、次に8番目に、この携挙というのは患難の直前に神様が力づくでも引き上げるということなんですが、そういった携挙を想起させるような物語が、実例と言うものが、聖書の中に実際にいくつか見られます。典型的なものを取り上げたいと思いますが、ロトという人の話です。ロトというのはアブラハムの甥おいであります。創世記18章で、このロトの家族はソドムに住んでいて、そのソドムは目に余るほどの腐敗したその罪に自滅しようとしていたんですが、ただ自滅するよりも、その罪が世界中に蔓延しよう、伝染しようという中で、このままであれば、ちょうど狂犬病のようにして、もうその病は不治の病で、放っておけば、全世界の、全人類が減ってしまう。そういう中で神様はソドムとゴモラ周辺の町を滅ぼされるということを決められます。これも神の憐れみです。どうせ放っておいても死ぬだけです。で、罪のない者たちも罪の影響を受けるわけですから、まあそこで裁きが行われるわけです。ただ、そこにはロトたちが住んでいました。アブラハムはその話を前もって聞かされた時に、「これは困ったことだ。神の裁きは確かに正当で、これは曲げられない。でもそこには愛する甥の家族が住んでいる。」そこで創世記の18章のところでアブラハムは神様にとりなしの祈りを捧げます。23節以降、後で読んでみて下さい。神様とそれこそ取引するようなことをやるわけです。「もしそこに50人の正しい人がいたら、どうかあなたの裁きを取り止めて下さいませんか。」「あなたの願うようにしましょうと。」「もしそこに45人の正しい人がいたらどうでしょうか。」「まあ段々、段々アブラハムは神様にバーゲンするようにして、値引きのようにして、45人、そして30人、そして20人、で、最終的には「もしその町に10人の正しい人がいたら、あなたはこの裁きを取り止めて下さいませんか。」「あなたの言う通りにしましょう。」と。でも結局のところは10人も正しい人はソドムにはいなかったわけです。まあ、いずれにしても、そこで神様が裁きを行われる直前に、ソドムに住んでいたロトたち家族に神様が救いの手を差し伸べます。二人の御使いを遣わします。そこには10人の正しい人、義人はいなかったんですが、ロトたちはアブラハムと同じ神を信じていました。墮落はしていました。バックスライドはしていました。でも、ロトたちは神様の憐れみを受けて、そしてそこから掴み出されるようにして、まさに“ハッピーゾー”されるようにして救われるんです。そのことが創世

記の 19 章 13～17 節に書いてあります。ロトと、その妻と、そして 2 人の娘が、2 人の娘は結婚していましたが婿たちはソドムの人間です。そんな話を聞いてせせら笑ったわけです。「そんな馬鹿な。ソドムの町が滅ぼされる。そんな馬鹿な話はない。」と。「御使いが助けに来た。そんな馬鹿な話はない。」でもロトは妻と二人の娘を説得して、何とか逃げようとするんですが躊躇しているわけです。でもその躊躇している彼らを手を、半ば強引に二人の御使いが掴んで引っ張ってくれたので、彼らは滅びから免れました。それが携挙の型ということです。「でも、ちょっとそれはこじつけじゃないですか。都合の良い解釈じゃないですか。」と思われるかもしれませんが、新約聖書の**第二ペテロ 2:6～9**を開いてみて下さい。聖書は聖書によって解釈すべきであります。勝手に象徴だからとか、これは自分なりのイメージだからということではなくて、予型論というのは必ず聖書で理解しなければいけません。聖書は聖書で理解する。**第二ペテロ 2:6～9**を読みますと『<sup>6</sup>また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました。<sup>7</sup>また、無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた義人ロトを救い出されました。(あんな自堕落なロトが義人と言われています。なぜ義人なのか。それは神を信じたからです。ですから、肉的に弱い人でも神を信じた者は義と認められるわけです。その信仰によって。行いによってではありません。信仰によって義と認められるので、義人です。聖人君子で義人と呼ばれているのではありません。ただ一点ロトはソドムの自堕落な生活を送っていたのにもかかわらず神を信じたんです。) <sup>8</sup> というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。<sup>9</sup>これらのことでわかるように、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し(この“誘惑”という言葉は実は“試練”とも訳されますけれども、これは“患難”と同じ言葉です。患難から救い出し)、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置くことを心得ておられるのです。』と。“誘惑から”というところが“患難”、またはもっと突き詰めて言えば“患難時代”から救い出し、と言って良いと思います。と言うのは、その前後を見て頂くと、これは終末預言の文脈だからです。患難時代、世の終わりの時代のその患難から、救い出される。ロトの救出は、まさに**患難前携挙説**を表しているわけです。

で、9 番目の根拠として、どうも**患難前携挙説**を信じないでいる人たちの中には、ノアという人を特に持ち出して「ノアはあの洪水を通ったじゃないか。信仰者は皆、患難時代を通らなければいけないんだ。」ということでノアを持ち出して、**患難前携挙説**を退けようとする人たちもおります。但し、結論から言いますと、ノアは教会の型ではありません。予型、タイプではありません。むしろノアはイスラエルの予型、型であります。患難時代にイスラエルの民はそこにとどめ置かれて、そこを通ります。患難を通りながらも、彼らは守られます。特にイスラエルの中で**黙示録 7 章**。**黙示録 7 章**は当然患難時代の真っ只中です。**6 章**から**19 章**が患難時代ですから、**7 章**に登場するイスラエルの 12 部族からそれぞれ選ばれた 14 万 4 千人の人たちがまさにノアに当ります。彼らそれぞれ印を押されて守られます。封印されているということです。ちょうどそれはノアが箱舟の中で守られていると同じ状態です。患難時代の中にあっても、彼らは守られるんです。一人一人はイエス・キリストを信じるメシアニック・ジューとして、まるでパウロのようにして世界中で大宣教活動を展開いたします。で、実際にノアは、新約聖書では“**義の宣教者**”と呼ばれています。ノアというのはですから、福音のメッセージを伝える宣教者、宣教師だということなので、14 万 4 千人はまさにそのような宣教活動を展開しますからピッタリであります。型としてはピッタリです。で、**創世記の 5 章**に、むしろノアと同じ時代に生きた人でエノクという人が登場します。**創世記 5:24**。(『エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。』)ノアの大洪水の前の時代、その**創世記の 5 章**にはアダムからの子孫の系図が出ているんですが、ちょうどそのノアの前、何人かできますけれども、レメクだとか、メトシェアラとか、またエノクと出てきますが、そのメトシェアラという人は歴史上人類の最長寿の記録として 969 歳も生きていますけれども、このメトシェアラという人の名前の意

味は「彼の死もたらす」ということで、メトシェラが死んだその年に、まさに大洪水が発生しました。でもその前にエノクという人は、地上から取り去られておりました。エノクは 300 年間神と共に歩いて、主は彼を生きたまま取られたんです。このことも**ヘブル書 11 章**にエノクのことが出ていますので、後で**ヘブル書の 11 章**でエノクのことも見て欲しいと思いますが、大洪水の前にエノクは主と共に 300 年間歩んでいたの、彼は主によって生きたまま取られました。死ぬことがなく取られたんです。これが携挙です。ですから、大洪水というのは、まさに神の怒りが注がれた患難と言って良いと思います。でも、その前にエノクは取られました。で、ノアはその洪水の中を箱舟の中で守られながら通り抜けていったわけです。ですから、エノクこそが患難時代の前に携挙される教会の型であり、ノアは教会の型ではないということです。ノアを教会の型としてしまうと、エノクは一体何なんだということになりますので、ノアはむしろ患難時代を通る 14 万 4 千人のノアのような宣教者たちということです。その方が自然であります。

で、10 番目の根拠として、**ダニエル書 9 章**。有名な聖書預言の中で最も有名な、誰もが知ってもらいたいという預言なんですが、ダニエルの 70 週の預言というのがあります。そこにはイエス・キリストが何年何月何日に来られるということがハッキリ分かる預言であります。驚くべき預言なので、まだ知らない方はまたいつか詳しく再び、何回も話してるんですけども、その時にはもう一度お話ししたいと思いません。今は適当にサラッと、この**ダニエル 9 章**に記されている 70 週の預言を説明したいと思います。**24 節**（『あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている。それは、そむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し、至聖所に油をそそぐためである。』）のところでこの預言というのは、まず誰に対して語られたのか。それはダニエルの民、すなわちユダヤ人に対して、そして聖なる都はエルサレムですから、この預言は少なくとも対象がユダヤ人、イスラエル人、そしてエルサレムを特に意識したものです。で、**25 節**に（『それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。』）そこには、“油そそがれた者”という言葉が出ていますが、これはメシヤ、キリストのことです。ですから、この預言の対象はユダヤ人。そしてエルサレムの町が舞台となって、さらにこれはメシヤ、油注がれた者、イエス・キリストに関する預言であることがハッキリしています。で、70 週という言葉がありますけれども、**25 節**のところには 7 週とか、62 週とかあります。まあ、その辺はまた詳しくお話ししたいと思うんですけども、これは何を意味するかということだけお伝えしたいと思います。70 週というのは、“週”という言葉は、ヘブル語では“**シャブア**”、と言って、1 週間を指す、7 日間を指すというふうにも使いますが、7 年間という年の週、日の週ではなくて、年の週も指します。7 年。ヤコブがどうしてもラケルと結婚したかった。だから彼は 7 年間叔父のラバン、そのラケルのお父さんに仕えたとあります。その 7 年間というのは文字通りは 1 週という言葉なんですけども、でもそこでは 7 年間と訳しています。文脈でこれを判断するんです。これが 7 日間を指すのか、7 年間を指すのか。同じ“**シャブア**”という言葉が使われてます。まあ、いずれにしてもここは 7 年間ということで、70 週というのは、ですから 70×7 年で 490 年というスパンが定められてます。ユダヤ人に対して、エルサレムという町に対して。そして、それはメシヤに関する預言と言うことで、70×7 年、すなわち 490 年間が定められていると。で、**25 節**のところには 7 週と 62 週とありますが、これはもちろん、7 週が 7×7 の 49 年、62 週は 62×7 の 434 年、足せば 49+434 年ということで 483 年という年数が出てきます。で、当時はバビロン帝国の時代で、1 年間は 360 日というものです。太陰暦です。イスラエルも太陰暦を使っています。1 年は 360 日ですから、483 年×360 日で 17 万 3 千 880 日という日が出てきます。で、この 17 万 3 千 880 日は一体何なのかというと、そこに記されているように『**エルサレムを再建せよ、との命令が出てから**』そこから 17 万 3 千 880 日を数えると、その時にメシヤが現れる。イエス・

キリストが登場するという年数、日付が出てくると言っているわけです。何年何月何日というその数字が出てくると言っているわけです。で、実際にそのエルサレムの再建勅令が出たのがいつだったのかというと、**ネヘミヤ 2:1** (『**アルタシャスタ王の第二十年のニサンの月に、王の前に酒が出たとき、私は酒を取り上げ、それを王に差し上げた。これまで、私は王の前でしおれたことはなかった。**』)に出てくるんですが、アルタシャスタ王という王様がエルサレムの再建を命じます。で、それはいつだったのかと言うと、それはこの王様の治世第 20 年のニサンの月とそこにはありますが、ニサンの月、何日とは書いてありません。もし、何日という細かい日付が書いてない場合は、そのニサンの月の第 1 日目を指すというのがユダヤ人の慣習でありますので、このアルタシャスタ王の第 20 年のニサンの月とは、太陽暦では BC 445 年 3 月 14 日であります。BC 445 年 3 月 14 日から 17 万 3 千 880 日後が、イエスキリストがこの世に来られる日だというのが、この驚くべき預言であります。で、「それはどうやって数えるんですか。」最近はずっと楽しくて、カレンダーがコンピューターで、もう <sup>さかのぼ</sup> 遡って、その時代からのカレンダーを見ることが出来ます。今でも皆さんがインターネットを使えば、その日がいつなのかが分かります。それは AD32 年 4 月 6 日です。日曜日です。それはヨハネの福音書の 12 章にもその日は、“しゅろの日曜日”だということが書いてあります。インターネットのカレンダーで AD 32 年 4 月 6 日を見てみてください。そこには日曜日の日付が出ております。ですから、結論から言いますと、このダニエルの 9 章はユダヤ人に対して、エルサレムの町を舞台としたもので、メシヤに関するもの。その日にイエス・キリストが来られる、生まれた日ではありません。“**来られる**”というのは、これはエルサレムの町に雌ろばの子の背に乗って王として入場される、勝利入場のことです。これが AD 32 年 4 月 6 日の日曜日、イエスがユダヤ人の王としてエルサレムに入場された。これがこのダニエル 9 章の預言であります。でも、その同じ週の間はこのメシヤは断たれてしまう、殺されると。その通りです。4 月 6 日の日曜日にエルサレムに入場しましたが、その同じ週にイエス・キリストは十字架刑にされます。そのことがそこに記されています。ただ、その後 27 節 (『**彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。**』)を見て頂くと、そこにはもう 1 週間別枠として区分けされています。で、そのもう 1 週間は、結論から言うと、世の終わりの 1 週間、7 年間ということですから、この 26 節と 27 節の間にはタイムギャップがあります。そのタイムギャップとはどのくらいのタイムギャップかということ、2000 年近いタイムギャップです。この預言はあくまでユダヤ人に対するもの、エルサレムという町に関するもの、そしてメシヤに関するものですから、それ以外の事は書いてありません。ですから、ここには当然教会なんていうものは存在しないわけです。教会はユダヤ人ではありません。エルサレムとも関係ありません。で、ここでそのタイムギャップのその期間というのが、いわゆる教会時代と呼ばれる時代です。私たちの時代です。ユダヤ人たちは自分たちのメシヤを、イエスをメシヤとして拒否するわけです。で、それ以来エルサレムの町はローマ帝国によって踏みにじられ、そして完全に祖国を失います。それからというもの教会時代が訪れてちょうど 26 節と 27 節の間がそれに相当します。但し、世の終わりになると再びイスラエルが世界の中心になります。教会時代が終わるということを意味しています。教会時代が終わったら 27 節の最後の 7 年間が来る。「教会時代はいつ終わるのでしょうか。」それは教会が地上から消えてからです。いずれにしても、この 26 節までの内容には教会は含まれていません。ということは、27 節の内容にも教会が含まれていないと考えるのが自然であります。患難時代に地上に教会が存在するというのは、おかしいことで、ダニエルの 9 章はあくまで教会以外のユダヤ人に対するもの、エルサレムの町に関するもの、でありますので、ここからも教会は患難時代の前に携挙されるということが確信出来ます。教会時代は使徒の働き 2 章から始まりますペンテコステの時に産声を上げます。で、現代に至るまで、そして今は教会時代の終わりに直面しています。

で、今度は 11 番目の根拠を見たいと思います。第二コリント 5 章 10 節『なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。』“私たちはみな”これは、クリスチャンは全員、避けられません。キリストのさばきの座に現われる。「クリスチャンもさばかれてしまうんですか。イエス・キリストが代わりにさばきを受けて下さったんじゃないんですか」と思うかもしれませんが、ここの“さばきの座”の『座』というのはまあ、ギリシャ語でいう“ビーマ”というもので、これはオリンピックの時に『表彰台』に使われる言葉です。ですから、これは有罪か無罪かというこのさばきのことを指しているのではなくて、むしろ褒章、報いを与える時の表彰台とイメージして頂いた方が良いと思います。クリスチャンは必ず天において報いを受けます。それは冠とも呼ばれたりもします。で、それはいつ起こるのかということ、携挙されたその時です。それぞれが地上において行ったその行為。それは自分のためだったのか、キリストのためだったのか。それはこの地上の目に見える一時的な世界のために行ったことなのか、それとも永遠になくならない世界のために行った永遠に価値のあるものだったのか。そこで判定されるわけです。でもしそれが永遠に価値のあるものであれば、それが天で報いとなって、冠となって与えられます。「その報い冠とはなんですか。天に宝を積むという言い方もありますが、その宝とは一体なんですかと。」それは天国でより一層あなたがエンジョイ出来るためのキャパシティです。天国生活をより一層出来るためのキャパシティです。受容能力と日本語で表現出来ます。同じ天国には行けます。でもそこでは天国をどれだけ満喫できるかは差が出てきます。で、これは実際にもう地上で、この差は出ています。同じクリスチャンで、同じ天国行きを約束されているのに、クリスチャンの間にはどうも温度差があります。その温度差というのはイエス・キリストをどれだけ知っているかです。イエスをよく知っている人たちは、イエスをもっと愛します。そしてイエスとの交わりをもっとエンジョイ出来ます。イエスをろくに知らない人たちは、イエスに愛されているかどうか分かりません。そういう実感がないんです。「なぜあのクリスチャンはあんなに喜んでいて、私は全然喜べないのか。なぜあのクリスチャンはあんなに辛いことがあるのに、あんなに平安ではいられるのか。私は同じクリスチャンなのに、どうしてこの差は。」その差です。それが天国でも顕著になります。ですから、そのようなキリストの御座のさばきで、そこが判定されます。で、実際にそれは携挙の時に起こると言いましたが、携挙というのは、実はユダヤ人の結婚式と密接な関わりを持っています。ユダヤ人の結婚式というのは、父親が大きな役割を果たします。必ず結婚したければ、まず父親の許可を得なければいけません。そして、父親が結婚式の日取りを決めます。これは、新郎も新婦も知らされないのです。父親が日取りを決めて、父親が許可をした段階で初めて結婚出来るわけですけれども、もし結婚するということになれば、必ず花婿は花嫁を迎えに行くことになるんですけれども、その迎えに行く時も、父が許可を与えて、大抵は真夜中にそれが行われるというのが、ユダヤの、イスラエルの結婚式の慣習でありました。真夜中に花婿が迎えに来るわけですから、花嫁は真夜中に来られても良いように当然準備万端整えておかなければいけません。で、それで、もしちゃんと結婚式の準備が出来ていなければ、急に花婿が来られてもすぐに対応出来ない、応対出来ないのも、これは大変な問題となるわけですけれども。まあ、そのようにしてイエス・キリストが、私たちの花婿として私たちを迎えに来られますが、その迎えに来られる日は、その時はいつであるのかは、これは父のみが知っています。イエスも知りません。私たち教会も知りません。で、迎えに来られたら必ずラッパが吹き鳴らされます。で、ラッパの音が鳴ったら、「あっ、花婿が来た。」と思って、すぐに花嫁は家から出て花婿を迎えに行きます。で、花婿も花嫁も家から出て道の途中で会うわけです。その道の途中で、そのストリートで結婚式が行われます。で、結婚式行われて、その後、花婿は花嫁を自分が作った新居へと迎え入れます。その新居は必ず花婿のお父さんの敷地内であって、そこにハネムーンを過ごす小屋が作られております。で、その小屋の中で水入らずで 1 週間花婿と花嫁は過ごします。で、外では客がその間お祝いして披露宴をしているんですが、1 週間終わると、

その愛の巢から花婿と花嫁が出てきて、そして花嫁のお披露目が来客に対して行われます。まあ、そういうユダヤ人の結婚式と、携挙というのはピッタリとイメージが重なります。7 日間の結婚生活、これは、まさにイエス・キリストが私たちをお迎えに来て、地上から空中に引き上げて、空中で主と会うんです。そこで結婚式が行われて、その後イエスは天のご自身が作られた父の家に私たちを迎え入れて下さいます。で、天では、7年間、地上では7年間、それぞれ全く違う時間が流れます。地上の7年間は患難時代です。天の7年間は、子羊の婚宴・披露宴と呼ばれる素晴らしいパーティーです。これが**黙示録 19 章**に書かれています。で、そのことについてはヨハネの**福音書 14 章**に、今私がお話したことが書いてありますので、そこをお読みしたいと思います。『<sup>1</sup>あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。<sup>2</sup>わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。<sup>3</sup>わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。』これが携挙です。“あなたがたをわたしのもとの迎えます。”と。地上から花嫁を引き上げて、その雲の中で出会う、これが結婚式です。そして、父の家、新居に迎え入れて下さって、7年間の披露宴が行われます。地上では7年間の患難時代です。で、7年間終わったら必ず花婿は花嫁をお披露目すると言いました。で、実際に7年間の終わりに天に引き上げられた花嫁は、地上の者たちにお披露目されます。イエスが地上に再臨される時、花嫁も一緒に地上に降りてきて、地上の者の目に留まるわけです。まあ、そのようなユダヤの結婚式と、そして携挙というのが、ピッタリとしたイメージであります。で、その時に“キリストの御座のさばき”という話をしましたが、結婚式の時には花嫁は冠を与えられるんです。それが報いでもあります。

で12番目の根拠として、**マタイの 25 章**に記録されているイエスのたとえ話ですが、世の終わりになると、これは厳密には、患難時代の終わりです。ハルマゲドンの後にキリストがさばき主として大きな白い御座のさばきを行います。これは**黙示録の 20 章**にも書いてある内容ですが、大きな白い御座のさばき。まあ、そのさばきのことが**マタイの 25 章**に書いてあります。後で詳しく読んでみて下さい。特にその後半のところ**31~46 節**にある、羊と山羊を分けるというところです。羊というのは見て頂くと分かるように、イエス・キリストの兄弟たちに対して、良くした者たち、親切にした者たちです。飢えた者には食べ物を与える。そしてイエスの兄弟というのは、もちろんユダヤ人たちのことです。患難時代に生きている人たちで、イスラエルの人たちに親切にした者たちは、羊と呼ばれています。で、彼らはこの大きな白い御座のさばきの時には、さばきを免れます。でも、その一方で患難時代においてイスラエルの人たちに親切にしなかった人たちは、山羊と呼ばれています。で、彼らは外に追い出されます。ですから、患難時代にイスラエルの人たちに、イエスの兄弟たちに親切にした人たち、守ってあげた人たち、彼らは皆、大きな白い御座のさばきを免れて、そして千年王国に入れて頂けます。まあ、この間私たちクリスチャンは何をしているのかというと、イエスと一緒にその千年王国を治める立場になります。私たちの体はもう今の肉体、朽ちていく体ではありません。もう朽ちない体に変えられております。イエスとともに1,000年間地球のどこかを統治するようになります。もし、携挙というものが患難時代の終わりならば、**患難期携挙説**であるならば、この**マタイの 25 章**は要らなくなります。このさばきは要らなくなるということです。羊と山羊に分ける必要はないんです。もし、**患難時代後の携挙説**であるならば、羊というのは、「これはクリスチャンを指すんだ。」という理解になりますので、もし携挙があるならば、抑々さばきなんか必要ないじゃないか、という話になってしまいます。

で13番目として、これは**患難中携挙説**と、また**神の怒り前携挙説**が根拠とする大事な聖句なんですけれ



ども。それは**第一テサロニケ 4 : 16** テキストになっているところです。携挙の時には神のラッパが吹き鳴らされるんですけども、**第一テサロニケ 4 : 16** (『主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、』)の“神のラッパ”という言葉に注目しておいて下さい。で、もう 1 カ所携挙を教える箇所があります。それが**第一コリント 15 : 52** です。そこを読み比べて欲しいと思います。**51 節**から読んでみたいと思いますが『<sup>51</sup> 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。(奥義というのが携挙のことです。) 私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。<sup>52</sup> 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。』携挙の時には、朽ちていく体が朽ちない体に一瞬にして変えられます。天国用の体が頂けるわけです。で、この“ラッパ”という言葉に**患難中携挙説**の人とまた**神の怒り前携挙説**の人たちが注目をして、**黙示録 11 : 15** (『第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」』)、そこはもちろん患難時代の真っ只中です。患難時代は**6 章**から**19 章**でありますから、その中の**11 章 15 節**はもちろん患難時代のど真ん中です。その時にラッパのさばきというのが行われます。で、ラッパのさばきで 7 つのラッパのさばきが行われますが、最後のものが第 7 のラッパのさばきということで、これが**患難中携挙説**と**神の怒り前携挙説**の人からすると、第 7 のラッパが「これが終わりのラッパではないか。」ということで、ですから、携挙は患難時代の最中にあるんだと、教会は患難時代を通るんだという理解に至るわけですがけれども、注目して頂きたいのは、この第 7 の最後のラッパではありますが、これは誰のラッパかということです。神のラッパではありません。これは、御使いの、天使のラッパなんです。携挙の時には、神のラッパが吹き鳴らされます。で、しかも、もしここにこだわっていくならば、これは最後のラッパではありません。というのは、この後にもまだ御使いはラッパを鳴らすんです。で、いつその最後の御使いのラッパがあるかということ、**マタイの福音書 24 : 31**。それはいつの話かと言いますと、患難時代の終わりです。イエス・キリストが地上に再臨される時にも、実は御使いがラッパを吹くんです。それが**マタイ 24 : 31**に書いてあります。『人の子は(イエス・キリストは)大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。』“選びの民”というのは、これはイスラエルのことです。世界中から集めて来ますと。これは地上再臨の時ですから、これは患難時代の終わり、7 年の最後です。ですから、第 7 のラッパ、患難時代の中期のラッパが、これが最後ではないということです。地上再臨の時もラッパが鳴らされます。しかもそれは、御使いのラッパで、神のラッパではありません。で、その 7 つのラッパは、7 つのさばきのラッパです。地上の人々に対するさばきを宣告するラッパです。キリストの花嫁に対して、結婚式の御触れとなるような喜びのラッパではありません。実は、聖書の中に神のラッパというものが 2 つしかありません。この 2 つのラッパというのは**民数記 10 章**にも象徴として使われています。銀の 2 つのラッパというのがあります。イスラエルの荒野の民を招集する時に、宿営が集められて、次の場所に移動する時に、この銀のラッパのうちの 1 つが吹き鳴らされます。で、もう一つは 2 つあると言いました。敵と戦う時に、戦いの招集の時にも使われるラッパです。で、神のラッパというのは旧約聖書の**出エジプト記 19 章**に最初に出てきます。まあ、これも**19 章**全体を読んでみて下さい。そこに神ご自身がラッパを吹き鳴らされます。その時にイスラエルはシナイ山の麓ちもとに集められます。招集されるわけですから、そこでイスラエルは国家として成立されます。続く**20 章**は有名なモーセの十戒の場面ですから、十戒という法律が与えられれば、国家は正式に誕生したことを、ここで確認出来るわけですから、神の最初のラッパというのは、**出エジプト記の 19 章**シナイ山の麓にイスラエルの民を集めてイスラエル国家が誕生したその瞬間です。で、もう一つの神のラッパというのが、私たちが今、テキストで見ている**第一テサロニケ 4 章 16 節**にある神のラッパです。その時何が起こったかということ、イエス・キリス

トが花嫁を集めるんです。神のラッパは常にその民を集める時に使います。イスラエルの民が集められる時、そして教会が集められる時、この 2 回しか神のラッパは吹き鳴らされておりません。その瞬間に地上から天国へと教会が引きあげられるわけです。それが最後です。最初のラッパが**出エジプト記 19 章**、で、最後ラッパが**第一テサロニケの 4 章**ということでもあります。それ以外のラッパもありますけども、神のラッパではないということです。

で、14 番目の根拠として、今度は**マタイの福音書 25 章 13 節**『だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。』先にも触れました。携挙のタイミングというのは誰も知らない。これは**24 章の 25 節**以降にも書いてあります。携挙のタイミングは、その日その時がいつであるのか、誰も知らないということです。で、そのことを踏まえて**第一テサロニケ 5:1**。これはもちろん前章の**4 節**が携挙でありますから、文脈は携挙の話です。『兄弟たち。それらがいつなのか、またどういつかについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。』で、それはまさにいつか分からない、盗人のようにやって来るということでもあります。もしあなたが**患難中携挙説**、若しくは**患難後携挙説**を支持しているならば、あなたは携挙タイミングが分かるようになります。その日その時がいつか分かるようになってしまうというわけです。というのは、患難時代が始まるのは、反キリストが登場してから 7 年間の和平条約を結ぶ時が、もうその最初であります。で、**患難中携挙説**をとる人たちは、そこから 3 年半後です。または 42 ヶ月後であります。または 1 年が 360 日で 1,260 日後という携挙の日が、その日その時が分かってしまうんです。でも、聖書の記述とはそれは相反します。その日その時がいつか分からないのが携挙であります。反キリストがその中期にエルサレムの神殿の至聖所の中に立って「私こそ神だ。」と宣言するその時が、携挙の時だということが分かってしまうのは、これは聖書に反します。携挙は予測不可能、いつ起こっても不思議ではないというものです。

で、15 番目の根拠として**エレミヤ 30:7** (『ああ。その日は大なる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。しかし彼はそれから救われる。』)に“ヤコブの苦難”という言葉があるんですが、これは英語では Jacob trouble と言って、“ヤコブ”というのはイスラエルのことです。7 年間の患難時代、その患難というのは、特にヤコブが、イスラエルが受ける苦難のことを言っています。イスラエルはイエスをメシヤとして拒否した頑固な民です。でも、この苦難を通して、7 年間の患難時代を通して、その頑固さが打ち砕かれて、イスラエルの多くの人たちが、「イエスこそ私たちのメシヤである。」と信じる、そのきっかけになるのが、道具のように使われるのが、この患難時代であるということです。で、他にも**申命記 4:27~30** までを読ませて頂きたいと思います。『<sup>27</sup>主はあなたがたを国々の民の中に散らされる。(これがイスラエルの民が世界中に離散される、ディアスポラとなるということです。)しかし、ごくわずかな者たちが、主の追いやる国々の中に残される。<sup>28</sup>あなたがたはそこで、人間の手で造った、見ることも、聞くこともせず、食べることも、かぐこともしない木や石の神々に仕える。(異教の民の間に住むということです。)<sup>29</sup>そこから、あなたがたは、あなたの神、主を慕い求め、主に会う。あなたが、心を尽くし、精神を尽くして切に求めるようになるからである。<sup>30</sup>あなたの苦しみの中にあって(この“苦しみ”、“患難”という言葉であります。)、これらすべてのことが後の日に(“後の日に”というのは、“終わりの日”にという言葉であります。)、あなたに臨むなら、あなたは、あなたの神、主に立ち返り、御声に聞き従うのである。』終わりの日に患難時代がやってきますが、その時にイスラエルの民は「イエスこそメシヤだ。」という信仰告白をして、彼らは救われます。この預言は**ゼカリヤ 13 章**にも書いてあります。自分たちが突き刺した方を見る。すなわち自分たちが十字架刑に磔にした方を見るようになる。で、**ローマの 11 章**にも『イスラエルは皆救われる。』というパウロの言葉があります。皆と言っても、もれなく全員という意味

ではありません。世界中のイスラエルの3分の1が救われるんです。3分の2は残念ながらイエスをメシヤとは信じません。これも**ゼカリヤ書**で教えられているところでもあります。ただ、患難時代はヤコブの苦難として、彼らは苦しみますけれども、最後にはイエスをメシヤと信じて、大挙してイスラエルの民が救われるということが約束されています。ですから、患難時代のひとつの大きな目的というのは、イスラエルの眠っていた目を覚ます、頑固な心を砕く、そして「イエスこそ自分たちのメシヤである。」ということ信じさせるための、その目的です。ということは、患難時代は一切教会とは関係ないということです。教会は患難が必要ありません。もう既にイエスを必要として、信じているからです。敢えて教会に目を覚まさせるような必要性はありません。イエスを信じていない者が必要であって、実際に私たち教会はイエスを既にメシヤと信じているので、患難時代は教会には不要だということです。だから患難時代の前に教会は携挙されるということです。

で、16番目は**第二テサロニケ 2:3~5**に、何度か触れている反キリストの登場シーンです、預言されています。それは反キリストのことを言っています。ヨーロッパの、欧州連合のリーダーで世界総統となる人物です。世界に新秩序をもたらします。ニュー・ワールド・オーダーというものです。かつて、ナチス・ドイツもそれを目指しました。かつて大日本帝国も大東亜共栄圏ということで、<sup>はっこういちう</sup>八紘一宇の名のもとに世界を統一しようとしたわけです。それと同じようなことを、反キリストがヨーロッパを舞台に行うわけですが、**第二テサロニケ 2:3~7**『**だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり**（世の終わりには必ず背教が起こります。背教というのは、もちろん教会と呼ばれる者たちがバックスライドするということです）、**不法の人**（反キリストです）、**すなわち滅びの子が現われなければ**（“滅びの子”というのはイスカリオテのユダにも使われている言葉です）、**主の日は来ないからです。**<sup>4</sup>**彼は**（反キリストは）、**すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に**（これはエルサレム神殿です。）**座を設け、自分こそ神であると宣言します。**（今エルサレムには神殿はありませんので、反キリストが再建します。もし、あなたがエルサレムに神殿を見たならば、あなたは携挙から漏れたということが、そこで判明します。）<sup>5</sup>**私がまだあなたがたのところ**にいたとき、**これらのことをよく話しておいたのを思い出しませんか。**<sup>6</sup>**あなたがたが知っているとおりに、彼がその定められた時に現われるようにと、いま引き止めているものがあるのです。**（反キリストが登場するのを引き止めているものがあると。それは一体何なのか。その力は一体何なのか。）<sup>7</sup>**不法の秘密はすでに働いています。**（もう、反キリストは今どこかにいます。）**しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。』**この引き止めている者、引き止めている力とは一体何なのか。結論から言うと、これは教会の中における聖霊です。教会の中の聖霊です。教会が地上からいなくなったら、「聖霊はいなくなっちゃうんですか。」そうではありません。聖霊はもちろん、どこにでもおられます。神様は遍在しておられます。どこにでもおられます。ただ、教会の中の聖霊は教会が地上から引き上げられるともなくなるわけです。ですから、教会の聖霊が今はこの不法の秘密が働いている中でも、反キリストが現れないように引き止めているわけです。教会がこの地上からいなくなったら、もう一挙に悪の勢力が、世界中に、爆発的に、洪水の如く押し寄せて来ます。今でも充分邪悪に満ちた世界ですが、教会がこの地上からいなくなったら、世の光がなくなったら、地の塩がなくなったら、もう世界は破滅です。教会があるから、まだマシだと言っても良いかもしれませんが。ただ、サタンは携挙がいつなのか知りません。携挙のタイミングを知っているのは、父なる神だけです。イエス・キリストですら知らないのに、サタンは知らないのです。つまり、サタンはどの時代に携挙があってもいいように、どの時代にも反キリストを用意しているんです。よく知ってもらいたいと思います。どの時代にも、サタンは反キリストを用意しています。まあ、ある人は、反キリストはあの第2次世界大戦中のナチスドイツのアドルフ・ヒトラーだ、と信じて

いた時代がありました。でも、そうではなかったんです。でも、サタンはひょっとしたらヒトラーを反キリストとして使う予定だったかもしれません。いずれにしても、どの世代にも反キリストに相応しい者を、サタンは常に用意しています。不法の秘密は、もうパウロの時代から働いていたわけです。サタンも携挙が分からないので、毎回毎回すべての時代、すべての世代に、反キリストを用意しなければいけない。大変な苦勞をしているわけですがけれども、まあ、ここで反キリストがいつ登場するのか。それを巡って色々な解釈があり、そこから携挙説も分かれてしまうわけです。**黙示録 6:2**に、もちろん**6章**というのは患難時代です。**6章**から**19章**は患難時代です。で、**2節**のところには白馬に乗る者がいます。で、白馬といえれば黙示録の最後の**19章**に、それはイエス・キリストだと思える人がいるんですけども、ただ黙示録の**6章**は患難時代の話です。白馬に乗っていますけれども、それはイエス・キリストではありません。なぜそれが分かるかということ、その後すぐに患難時代の現われとして、戦争、飢餓、流血、そして地上の4分の1の人口が殺戮されるみたいな内容になっていくので、これはあくまでイエス・キリストではないということが、もうすぐに分かります。これはイエス・キリストにそっくりな、イエスに取って代わるようなことをやってしまう反キリストのことを指しています。反キリストというのは、キリストに反対する者というイメージを持つかもしれませんが、英語では Antichrist、ギリシャ語では antichristos、”anti”というのは“反対”という意味もありますが、これは“取って代わる”という意味もあります。キリストにそっくりなことをする。実際に、**第二テサロニケ 2:9**に『不法の人の到来は（反キリストの到来は）、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、』反キリストは、力、しるし、不思議を行います。でも、それは全部偽りなんです。力、しるし、不思議、これはイエス・キリストも行われたものと全く同じものです。原語はいっしょです。但し、それは偽りなんです。反キリストもイエスと同じようなミラクルメーカーだということです。実際に**黙示録**を読むと、反キリストは一旦死にます。でも甦るんです。そういうこともやってのけます。だから人は騙されるわけです。「まるで白い馬に乗った白馬の騎士です。この方こそメシヤです。」と、ユダヤ人たちも騙されます。というのは、ユダヤ人たちは自分たちの神殿をこの人に建ててもらおうからです。神殿を再建するものがメシヤだと、ユダヤ人は信じきっていますので、反キリストこそ約束のメシヤだとユダヤ人はすぐに信じるわけです、騙されるわけです。でも、パウロは「騙されないでいなさい。」と言っています。で、ここで覚えて欲しいことは、**黙示録 6:2**の白馬の騎士は、これは反キリストであって、キリストではないということです。教会はもう**6章**の前に天に引き上げられております。教会は反キリストが現れる前に、もうこの世にはいないということが、そこからも分かります。

で、17番目として**テトス 2:13**。これも携挙の教えの箇所です。『祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。』この“キリスト・イエスの栄光ある現われ”というのが携挙のことです。で、これは祝福された望み、希望だと言っています。私たちが探し求めるべきは、イエスキリストであって、反キリストではありません。もし、**患難前携挙説**で無い限りは、すべての説は反キリストを探し求める羽目になります。反キリストの現れるタイミングが、彼らにとっての最大の関心事になります。そこから患難時代がスタートするので、そうすれば**患難中携挙説**の人は、数えれば3年半、42ヶ月、1,260日、その時に携挙があると分かってしまうわけです。また**患難後携挙説**の人たちは、やはり同じように7年間の後に携挙があるということで予測出来ます。**神の怒り前携挙説**の人も同じです。反キリストが現れてナンボのものです。ですから**患難前携挙説**以外の説を採る者たちは、イエス・キリストよりも反キリストのこの方にもっと関心を持ってしまいがち、フォーカスを置きがちということになります。でも、**患難前携挙説**の人たちは、反キリストの登場なんかどうだっていいんです。彼らの関心事はイエス・キリストのみです。イエスにフォー

カスを置くこと。イエスにのみ目を注ぐこと。イエスから目を離さないでいられるのは**患難前携拳説**だけ  
であります。それ以外の説は、イエス以外の反キリストにどうしても執着してしまうということです。

で、18番目としてマタイの**福音書 24 : 45～51**。これで聖書から**患難前携拳説**が正しい、と主張する私  
の皆さんにお分かちする根拠の最後です。本当はもっとあるんですけども、このぐらいにしておきます。

『<sup>45</sup>主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思  
慮深いしもべとは、いったいどれでしょうか。<sup>46</sup>主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見ら  
れるしもべは幸いです。<sup>47</sup>まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるよう  
になります。<sup>48</sup>ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い、<sup>49</sup>その仲  
間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、<sup>50</sup>そのしもべの主人は、思いがけない  
日の思わぬ時間に帰って来ます。<sup>51</sup>そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに  
違いありません。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。』ここで悪いしもべについて、特に**48節**  
のところを見てください。“ところが、それが**悪い**しもべで”、“**悪い**”という言葉は、ギリシャ語では「かつ  
ては良かったけれども、今は悪くなってしまった」というニュアンスの言葉です。もともとは良いしもべ  
だったんですが、どこかの段階で悪くなってしまったというニュアンスを持った言葉で、“**悪いしもべで、**  
**『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思**”っている者が、悪いしもべです。かつては良いしもべだっ  
たんです。でも『**主人はまだまだ帰るまい。』**と**思**っている段階で、もう悪いしもべになっております。「携  
拳はまだまだあるまい。だって、まだ反キリストも現れていないし、患難時代も始まっていないし、主人  
が帰るのは、イエス・キリストが帰るのはまだまだだ。」と**思**っている者は、ここではハッキリ悪いしもべ  
だと言われてしまっております。まあ、その悪いしもべというのはもちろん**49節**を見ていただくと、仲間  
を打ちたたき。または、酒飲みたちと飲んだり食べたりしている、この世を謳歌しているわけです。人を  
いじめたりするわけです。仲間ですから、クリスチャンたち、教会の中の人たちを馬鹿にしたり、非難し  
たり、「患難前携拳説、そんなおとぎ話信じているのか。馬鹿じゃない。」それも含まれているかもしれま  
せん。で、それと全く対称的にコントラストとして、**第一ヨハネ 3 : 1～3**。『<sup>1</sup>私たちが神の子どもと呼ば  
れるために、—**事実**、いま私たちは神の子どもです。—御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださ  
ったことでしょう。世が私たちが知らないのは、御父を知らないからです。<sup>2</sup>愛する者たち。私たちは、今す  
でに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら（携拳  
の時には）、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリス  
トのありのままの姿を見るからです。<sup>3</sup>キリストに対するこの望みを（希望を）いただく者はみな、キリス  
トが清くあられるように、自分を清くします。』携拳の希望をもっているものは、『**キリストが清くあられる  
ように、自分を清くする。**』これが良いしもべです。悪いしもべは何だったのでしょうか。「主人はまだまだ  
来るまい。まだ反キリストも現れていないし。」そういう者たちは、仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲み  
食いして、まだこの世に執着しています。イエスは今日帰って来るまいと。3年半後ですとか、7年後です  
とか。仲間を打ちたたいて、酒を飲み、食べたりしている。言葉をもって人を傷つけたり、この世の現世  
利益にすっかり心を奪われてしまっている。「主人はまだ帰るまい。」それは悪いしもべだと言われていま  
す。主が戻って来られる日は、今日かもしれません。今かもしれません。

これで18根拠をもって、何故に**患難前携拳説**が正しいのか、ということをご皆さんに聖書からお伝えして  
きたんですけども、最後にその**9つの効果**について話して終わりたいと思います。**患難前携拳説**を信じる  
ということはどんな影響を信者に与えるのか。神学的な問題について興味のない人もいるかもしれませんが、  
実際のところは悪いしもべになり兼ねないということは、これはあなたは「そんなのは神学の難しい

話で、私のようなベビークリスチャンには何の関係もありません。」ということにはきっとならないと思います。誰でも悪いしもべにはなりたくないと思ってるでしょうから。そして誰でもイエス・キリストに常に目を留めていたい、イエス・キリストにフォーカスを置いていたい、イエス・キリストを探し求めたい、と願っているのが良いしもべだと思いますので、先ず押えて欲しいことは、必ず聖書の教理はライフスタイルに影響を与えるということです。何も信じているか。これはその人の人生観、世界観、すべての実生活における価値観に多大な影響を及ぼします。**患難前携挙説**を信じるか、それとも別の説を信じるかでは、その生き方が、信仰生活も教会生活も何もかもが一変します。全く変わってしまいます。だから、大事なんです。で、9つ言います。効果です。

まず第1番目に、もしあなたが**患難前携挙説**を信じるならば、あなたは教会に行きます。これは効果です。ヘブル書10章23～25。『<sup>23</sup>約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。<sup>24</sup>また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。<sup>25</sup>ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで（教会に行くのをやめたりしないで）、かえって励まし合い、かの日が（携挙の日です。）近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。』「主は今日戻って来られるかもしれない、明日かもしれないけれども、そんなに遠くの話ではない。」と信じているならば、励まし合って、慰め合って、「教会に行こう。ひとりでは信仰生活は送れないから。皆で一緒に携挙されよう。」と、これが効果です。

第2番目は、**第一コリント 11：26**。これは皆さんもよく知っている聖餐式の規定の場面で『**ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで（携挙の時まで）、主の死を告げ知らせるのです。**』**患難前携挙説**を信じる者は、教会に行くだけではありません。教会に行ったら聖餐式を守ります。主の命令だからです。主はあなたのために死んで下さいました。そのことを記念して、パンと杯でお祝いするんですけども、それはいつまでやるのか。携挙までであります。

で、第3番目として、**第一テサロニケ 3：12～13**。4章が携挙のところでした。『<sup>12</sup>また、私たちがあなたがたを愛しているように、あなたがたの互いの間の愛を、またすべての人に対する愛を増させ、満ちあふれさせてくださいますように。<sup>13</sup>また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。』これは携挙のことです。既に天に召された聖徒たちを連れてきて、4章を見て頂くと、その者たちと一緒に雲の中に引き上げられるとありますから、ここで言わんとしていることは、**患難前携挙説**を信じる者は、必ず兄弟姉妹の間で愛し合うようになります。これが効果です。兄弟を愛するようになります。一方で、先ほど読んだ**マタイ 24：49**の「主はまだ帰って来ない。主人はまだまだ帰って来ない。」と言うあの悪いしもべは、何をしていたでしょうか。仲間を打ちたたき、酒を飲んで食べたりしていた。この世のことにかかりつきりです。この世で如何に成功するか、如何にこの世で快樂を味わうのか、謳歌するのか。クリスチャンなのにそんな事しか考えません。または仲間を打ちたたき。愛し合うなんていう話ではありません。これは携挙を信じていないからです。もちろん携挙と言っても、**患難前携挙説**でなければいけません。それ以外は主人が帰ってくる日が分かってしまうので。

で、4番目は、これは先ほど読んだ**第一ヨハネ 3：1～3**のところで、携挙の時には、キリストが清くあらられるように、自分を清くする。**患難前携挙説**を信じるものは、清い生き方をするようになります。主が戻って来られるから。そのことを知っている者は、先ほどもコントラストで**マタイ 24：46**のところで読

みましたけれども、『主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。』主が戻って来られる。今かもしれません。今晚かもしれません。その時にあなたは何をしていますでしょうか。自宅でインターネットでポルノサイトを見ているでしょうか。そこに主が来られたらどうですか。携帯電話でどうですか。何を見えていますか。雑誌を、漫画を。その時に、イエスが来られた時に、テレビを見ていて、または家で夫婦がいがみ合って、怒鳴りあって、大喧嘩をしている。そこにはイエス・キリストが戻って来られたらどうでしょうか。考えて欲しいと思います。車の運転中どうでしょうか。前の車がトロトロ走って、イラついて、「早くどけ。」とか。主が本当に戻ってこられるそのタイミングは、それは誰にも分かりません。今かもしれません。もしそのように信じている者は、自分自身を清くします。ですから、**患難前携挙説**を信じているクリスチャンたちは、地上では最高の生き方が出来ます。本当にイエスが戻って来られることを、本気で信じてるならば誰も犯罪を犯しません。イエスがいつ戻って来られても良いわけですから、そんな悪いことをしている場合じゃありません。

で、5番目、**第一コリント 4:5**。そちらでは**患難前携挙説**を信じる者は、人をさばかないと書いてあります。『ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。』主が来られるまで、携挙の時まで、先走ったさばきをしてはいけません。あなたは神のようにすべてを知っているわけではありません。何もかも分かって、全て判断材料が揃って、それで判断出来るわけではありません。ですから、先走ったさばきをしてはいけません。もちろん聖書の真理に基づいて、それが罪であれば、ハッキリとそれを白か黒かさばくことは、判定することは出来ます。でもそれ以上のさばきはいけません。分からないことであなたは先走ったさばきをしてはいけません。**患難前携挙説**を信じる者は、人をバツバツとさばくようなことはしなくなります。もう主が来られれば、自分がさばかなくていいからです。あなたがさばき主ではありません。あなたが裁判官ではありません。義なるはお方がさばいて下さいます。主がさばきます。「それはいつまでですか。自分が死んでからですか。」そんなことは思いません。なぜならば、イエスはいつ戻って来られても良いと思っていますから。「こんな状態が何年も続くのか。」なんて、その人は思いません。「もう、今日主が戻って来られる。」そのつもりでいますから、一々はこだわりません。

で、6番目に**ヤコブ 5:8**。『あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。』携挙が近いんです。だから耐え忍びなさい。忍耐出来ます。心を強くできます。**患難前携挙説**を信じる者たちは、忍耐強くなります。心が強くなります。素晴らしい効果です。

で、7番目として**ユダの手紙 1:21~23**。『<sup>21</sup>神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。<sup>22</sup>疑いを抱く人々をあわれみ、<sup>23</sup>火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によって汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。』これは最近**ユダの手紙**を学んだばかりなので、記憶に新しいと思いますが、**21節**の“主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。”これは携挙のことだとお話しました。で、ここで何が言われているかというと、**患難前携挙説**を信じている者たちは、罪人に福音を宣べ伝えて、彼らを永遠の滅びから救いたいと強く願うようになります。人々の魂をキリストに勝ち取りたいと強く願うようになります。それが**患難前携挙説**を信奉する人たちの宣教に対する情熱です。「もし、今日携挙があつたらどうしよう。」あなたの親は救われていますか。あなたの夫は、あなたの妻は、あなたの子供は、あなたの兄弟は、あなたの孫は、あなたの親友は、皆救われていますか。救われていないならば、すぐにでもイエス・キリ

ストのことを宣べ伝えなければいけません。そうでなければ、携挙された後、彼らが救われる可能性は、今よりも格段に下がります。今は恵みの日です。今は救いの日です。でも、患難時代が始まったら、イエス・キリストを信じるのが今よりももっと困難になります。簡単な時代ではありません。終わりの時代は困難な時代だと言われています。今はまだ携挙される前、教会がいる間は、悪霊の力も抑えられています。ですから今、いつ携挙されてもおかしくないと思っている者たちは、速攻でキリストのことを宣べ伝えます。いつかなんてことは、悠長なことは言いません。いつかは無いからです。

で、8番目としてコロサイ 3:1~4。『<sup>1</sup> こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。<sup>2</sup> あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。<sup>3</sup> あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。<sup>4</sup> 私たちのいのちであるキリストが現われると（携挙の時です。）、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。』新しい栄光のからだを頂けるといっていますが、ここで**患難前携挙説**を信じる者たちは、上にあるものを求めます。下にある、地上のもの、一時的に消えゆくものには目を留めません。むしろ、上にある、永遠に価値のある、消えゆかないもののために生きるようになります。それがイエスが言われているところの「**天に宝を積みなさい。**」というところでもあります。地上のことばかりに目を留めません。イエスを見ます。株ばかりに目を留めません。先物取引ばかりに目を留めません。イエスに目を留めます。地上で金持ちになるんじゃなくて、天国で金持ちになることを求めます。それが**患難前携挙説**の人たちのメンタリティとなります。それがその人たちのライフスタイル、価値観になります。地上のものに固執しない。むしろ、天のものにもの凄くこだわりを持ちます。

で、最後に9番目として、これはテキストの結びの言葉、**第一テサロニケ 4:18**。『**こういうわけですから（携挙の教えの結論です。）、このことばをもって互いに慰め合いなさい。**』**患難前携挙説**を信じる者たちだけが互いに慰め合うことが出来ます。あなたの今抱えている問題は、今直面している困難は、今経験しているその痛みは、悲しみは、その辛さは、必ず**“かの日には”**、携挙の時には、すべてイエス・キリストによって拭<sup>ぬぐ</sup>われる、解決される、癒やされる。ですから、天国への希望もそこに含まれています。天に引き上げられるわけですから、地上がすべてではない。私たちには住まいがあります。父の家には沢山の住まいがあります。そこにイエス・キリストが私たちを入れて下さる希望があります。だから、**ヨハネの福音書 14章**のところにもあるように、『**心を騒がしてはなりません。**』と。トラブってはいけないと言っているわけです。**患難前携挙説**を信じる者たちは、一々心を騒がせません。トラブってもならないと言っています。なぜならば、かの日が近いからです。あなたが今心配しているその時に、携挙があればもうどうでも良いわけです。「支払いどうしよう。」と思っている時に携挙があつたら、もうラッキーですね。もう心配いりません。支払いのことで悩むことはありません。ですから、本当に慰め合うことが出来ます。携挙のことが全く頭にない、天国のことなどすっかり忘れていて、永遠の世界なんて片隅にもない人は、常に心を騒がせます。ですから、常に落ち込みます、トラブります、鬱になってしまいます。イエス・キリストをその人は見ておりません。イエス・キリストを見ないで反キリストばかり見ている人も同じであります。必ず心を騒がせてしまいます。必ず鬱なり、取り乱すようなこととなります。思い煩いは常につきまといまふ。携挙は差し迫っています。いつでも起こりうるイベントであります。イエス・キリストは今日、今、帰り道、戻って来られるかもしれません。そのことを是非楽しみにして頂いて、まあ、皆さんはそれぞれいろいろな考え方を持っているかもしれませんが、**患難前携挙説**だけが正しいと私はハッキリ断言したいと思います。で、実際にもし私のこの考えが間違っているとしても、私は気にしません。というのは、パウ



ロだって私と同じ考えを持っていました。自分の時代にイエス・キリストが戻ってこられると、最初のクリスチャンたちは皆そう確信して信じていました。「でも、実際にイエスは来なかったじゃないですか。」とあなたは言うかもしれません。「馬鹿見たんじゃないですか。」私は馬鹿だと言われようと、何でも構いません。むしろ、私はパウロのように、ペテロのように、ヨハネのように、本当に自分の時代にイエス・キリストが戻って来られると確信した、そういう生き方をしたいと思っていますので、実際のところはイエスが自分が生きている間に戻って来られようと、戻って来まいと、どちらでも良いんです。確実に戻って来られることだけは分かっていますので、ですからこの説だけがハッキリ言えばパウロのような、ペテロのような、使徒たちのような、素晴らしいクリスチャンとしては最高の生き方をもたらすということなので、それ以外の説では彼らのようには生きることは出来ません。そのことは最後に釘を刺しておきたいと思います。皆さんはどのような生き方をしたいでしょうか。神学の見解の違いではありません。あなたの生き様です。あなたのライフスタイルを私は聞きたいんです。今日はこれで、今までで一番長いメッセージになったと思いますが、携挙があっても良いように、後悔しないように話をしましたので、もしかしたらこの後携挙があるかもしれません。では、これで終わりたいと思います。